

法と薄層クロマト法によって化学成分を検査して、その結果を第2表に示した。また佐藤博士は本属をカムリゴケ節 (sect. Eupilophorion) とマルミカムリゴケ節 (sect. Nigricaulia) に分けることを提唱された。しかしその根拠となった子柄の軸の色や、軸をつくる菌糸の密度にはかなり個体変異が見られ、とくにカムリゴケモドキは両節の中間型を示すので、ここでは佐藤博士の分類方式をとらなかった。

○外来植物の人為的散布の一例 (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: On the *Solidago canadensis* group widely spread by bee-keepers in Japan.

近年、我国各地から外来のアキノキリンソウ属 *Solidago* の爆発的な繁殖、広分布が報ぜられている。その正確な種名の検定については、今後全国的な規模で種々な観点から検討を要するが、いずれにしてもこの大形の *Solidago* の仲間が第2次大戦後にどのようにして急激に拡がり、特に市街地周辺の荒蕪地やそれに近接した丘陵地帯に生育して、大群落を形成するに至ったかについては、外来植物調査上、誠に興味ある事実と云わねばならない。勿論我国に現在渡来している *Solidago* は、その他の外来植物に比較して草丈も高く、繁殖力も大きく、しかも開花期には米名 Goldenrod の名にそむかぬ鮮黄色の花穂を一面に波うたせ、群生地の景観を一変させる極めて目立った存在であることも、この仲間が一般的に注目される所以であろう。

従来本種の分布原因としては、その觀賞価値に伴う人為的な移植及び地下茎による旺盛な繁殖力などが挙げられていたが、しかしそれにも自から限度があり、その新地域（特に都市周辺の原野、堤防、荒蕪地など）への、この大形植物の移動、分布要因について、筆者は少からず疑問と興味とを抱いていた次第である。ところが頃日、はからずもその一因とも云える事実を知り得たので、ここに記録し同学諸氏の御参考に供し度いと思う。ご承知のように養蜂家にとって、いわゆる蜜源植物は蜂蜜の生産に随伴して欠くことの出来ない存在である。しかしながら近年、我国の自然の破壊及び都市周辺の農耕地の宅地化は、実にめざましいものがあり、これに伴ないいわゆる蜜源植物が年々極度に減少の一途を辿りつつあることは周知の事実である。そこで、これに対応するため、養蜂家は蜜源植物の増殖と獲得にのり出し、種々努力を続けていくが、この一環として現在各地で話題となりつつある外来の *Solidago* がクローズアップされて来たものである。

蜜源植物となるためには種々の条件（増殖率や適応性が大きく、多数のものが一個所にまとまって生育し、一時に多量の花蜜を供給し得ること、及び開花が長期に亘ることなど）が必要であるが、この中でも晩秋まで開花し、しかも前述の諸条件をも可成り充たすものとして本種が着目された次第である。その結果、日本蜂蜜協会の指導者がこれを取り上げ、これを各地へ増殖するよう配慮したものである。これに呼応して関係者（全国で約1万人の協会員のうち、数千人がこれに関与したと云う）は、極めて

積極的に活動を行い、本種を各自が自庭に栽培、増殖せしめ、これを各地へ配布、移植したと云う。

その結果として現在各地で見られるような、開花期には群生地が鮮黄一色に塗りつぶされる驚異的な生育状態を示すに至り、関係者は一応その所期の目的を達した次第である。しかしながら強ち、これのみが本種を全国的に分布せしめた原因とは考えられないが、外来植物が人為的に散布された顕著な一例として、筆者が見聞した事実を記録に止め、将来我国の外来植物相調査、研究資料の一助としたいと思う。因みに、*Solidago* の仲間から採取された蜂蜜は、製品として上等の部類には入らず、脱色、脱臭(脂)してからでなければ販売ルートには供せられるものではなく、従って、もっぱら冬期の蜜蜂の食餌用として採用されている由であった。しかしいずれにしても、現在養蜂家にとって本種が極めて有用なものとなっていることは明白な事実である。

なお蛇足ながら、近年我国でもその研究が盛んになりつつある、いわゆる花粉病(Pollen disease, Pollenosis)の原因植物の一つとしてブタクサ及びオオブタクサに次いで、この外来の *Solidago* が上述の広分布と相まって、ようやく問題化し始めたこと(朝日新聞、昭和 44 年 11 月 9 日所載)を附言しておきたい。いずれこの点については斯学の専門家により見解が発表されることと思うが、今後医学的見地からも有害な外来雑草の我国への侵入、分布及び繁殖の防止に、われわれは大なる関心を持って当らねばならないと思う。

終りに本稿を草するに当り、種々御教示、御援助下さった久内清孝先生、東大の原寛教授及び富山大学の河野昭一博士、また外来の *Solidago* の分布原因について資料を提供して戴いた日本蜂蜜協会専務理事の高山南山氏に対し、厚く御礼申上げる次第である。

(東京歯科大学)

*Solidago canadensis* L. and its allied species, native of North America, were probably introduced directly from N. America to Japan first for ornamental purpose approximately fifty years ago or perhaps more.

In recent years, however, this species complex here in question has very widely spread all over the Japanese islands, often forming large communities in waste lands around cities, fields, on river banks and so on.

It is also well known today that the present species allies have extensively been transplanted by Japanese bee-keepers as honey-bee plants in Japan since several years ago. It is most likely thus that a very rapid dispersal of the plants referred to the *S. canadensis* complex in recent years has largely been accelerated by the popularization of bee-culture in Japan.